

交 流

地域教育と協働のまちづくり

広島商船高等専門学校流通情報工学科
岐 美 宗



みちよし つかさ

〒725-0231 広島県豊田郡大崎上島町東野4272-1 広島商船高等専門学校流通情報工学科

■ はじめに

2008年度に採択された文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム（注1）」の連携校担当者会議の席上で、広島文化学園大学看護学部教授の山下洵子先生と出会った。その縁で、数ヶ月後、著者も委嘱されている広島県地球温暖化防止活動推進員を通じて数年来継続している地域教育モデル事業のひとつ「流通実験店舗 Cozy Cafe」での再会があった。「出会いとつながり」を地域教育の精神とする試みを紹介したい。

（注1；国公立大学間の積極的な連携による教育研究資源を有効活用することで、地域の知の拠点として教育研究水準のさらなる高度化、個性・特色の明確化、大学運営基盤の強化等を図ることを目的とした補助事業である。申請先は文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室改革支援第二係：03-5253-4111（内線3319））

■ 地域教育の実践

地域教育モデル事業は「協働のまちづくり」の実践である。大学時代の恩師からご指導を頂いた現場第一主義の教えを、15～22歳の若い学生諸君と一緒に自ら実践している。その代表が『空き家を再生した流通実験店舗と寺子屋学習・交流塾の開設』である。この事業は「学生自らがビジネスを成立しながらおこなうまちづくり」である。まちづくりの舞台は大崎上島の対岸の竹原市重要伝統的建造物群保存地区で、江戸期に塩田で栄えた町並みが今でも残り日々の生活が送られている。年間の観光客は約20万人を数える一方で、空き家・高齢化率が高く官民協働によるコミュニティの再生は急務の課題とされている。

著者が広島に赴任して間もない頃である。竹原市より協働のまちづくりのあり方を審議せよと会長を委嘱され、議論を始めて大きな壁に遭遇した。自らが地域特性や住民気質を理解する必要がある。ちょうど、専門科目の現場実習場を企画していたことも重なり、学生が地域と交流することで新しいまちなかコミュニティが誕生するきっかけになるかもしれないとの希望を抱き、学生による手づくりの地域貢献に挑戦した。

事業の特徴は、空き家を再生して開設した流通実験店舗の利益に、ひと（学生や地域人材）や専門技術を加えることによって寺子屋学習・交流塾で地域教育に還元するコミュニティ・ビジネスの試行である。2005年5月に開設し、これまでの4期148日間の営業で6,400人の来店者と400人の塾生を迎え、改良しながら5期目のビジネスを継続している¹⁾。構想から開設までの苦労の一方で地域の笑顔に心から感謝している。

まちづくり教育では、多くの学生アイデアを具現化している。市民団体の皆様や行政・商工会議所との協働で、郷土学『瀬戸内海学講座（2005～）』を開催したり、郷土料理『たけはら魚飯（2009）』の復刻である。また、『ぶら～り学習・交流しながら竹原まち歩き（2006～）』や『たけはら一店一自慢おでかけまっぷ（2007）』などの地域資源紹介の小冊子をデザイン・発刊した。100名の学生が現場で取材を重ねながら企画から発刊までを経験した冊子は今も地域で愛用されている。ほかにも、幼小中学生を対象として、身近な自然を題材にした実験や工作をする『環境学習塾（2002～）』や地産地消を食育する『知産知食塾（2008）』の開催、『防災用移動式ソーラー発電システム（2007）』の開発・寄贈、そして現在は『瀬戸内マリレビュー号「ぶらり旅商品」（2009）』の開発などを進めている。

いずれの事業も、店舗や塾へ市民や地域人材が多く出入りしている。ここでの出会いは新たな交流や連携へと発展し、まちおこしの火種役・つなぎ役としての立場を担うように成長しつつある。

■ 地域課題とPBLによるPDCAサイクル

流通実験店舗と寺子屋学習・交流塾で実践するコミュニティ・ビジネスは、ボランティア活動とは異なり、交流スペースが少ない、人材の活用ができない等の地域が抱える課題を継続的なビジネスでの解消を成果としながら、地域社会の意義や意味を追求することにある。著者は学生に流通情報工学科で流

通システムや経営システムを教育している。そこで、学生は店舗で自らマーチャンダイジングを実践し経営管理を習得している。また、塾で地域住民との交流を重ね、まちなかコミュニティづくりに貢献している。

地域教育は「ひとづくり」のヒントを与えてくれる。学生はPBLによる課題解決のスキルアップとPDCAによる自律サイクルを経験している。PBL（Problem-Based Learning）は探求創出型教育で、学生自らが一貫して主体的な立場で現場に直面する課題を解決し、その方法を他人に説明できるようにする方法である。すなわち、知識伝達型教育は系統的に整理された情報を講義形式で一方向的に伝授する受動的な学習であるのに対して、PBLは現場に介在する課題に関わる知識をチームやグループで自主的に相互協力的に学習する能動的な学習である。そもそも、PBLはカナダのMcMaster Universityの医学部で提唱され、臨床医学の教育現場で患者の症例を用いて知識と技術を体得させることが目的と言われている²⁾。その後は医療だけでなく経済活動や教育など様々な分野でPBL方式の授業が普及している。

PDCA（Plan-Do-Check-Act）は、「計画・実行・評価・改善」を螺旋状に継続的に事業展開するマネジメント手法である。学生は課題に対する自己学習を行い、得た結論をチーム内で議論しながら解決策を情報共有し、実践を繰り返しながら評価と見直しを行うという自律プロセスを経験している。

さて、著者は日頃より知識や技術の習得は教科目を越えた現場との接点のなかで成立すると考えている。PBLとPDCAによる座学と現場の接着はプロセスのマネジメント力を養い、失敗・成功の体験は精神力と自己統制力を培い、寺子屋スタイルは教育の送り手と受け手の相互理解を形成し、世代間の交流は礼儀や立ち振る舞いを習慣づける。目指すは「社会愛を持つ人間力の向上」である。すなわち、学びと社会が融合した「地域教育」は家庭教育や学校教育の枠をこえた協同的な教育方法で、学生のみならず交流する全てのひとの人間力を育むことで、地域社会のソーシャルキャピタル（地域力）を養うことができよう。すなわち、地域教育はソーシャルキャピタルの構成要素と言われる「信頼・行動規範・社会的ネットワーク」の横断的な構築へのプロセスと考えている³⁾。

■ ひとづくりの将来像 —まち医者—

地域教育モデル事業を展開するなかで、学生が多くの人と交流する場面を演出するよう努力している。最初は地域との接触に抵抗を示す学生も、経験を重ねるうちに相手を意識した言動へと変化していく姿が観察できる。そして、学生の顔ぶれは違えども、その精神は毎年引き継がれていることに力強さを感じる。地域に支えられてきた学生諸君の汗と青春が地域を愛する気持へと変わり、人と人との交流、そして学校と地域との連携を強くしていく。すなわち、「まち」という舞台と「ひと」という演者の融合が持続可能な地域コミュニティであり、担い手の一つが学生であり学校であると考ええる。そして、地域教育を実践しながら、「まち」を問診・聴診・触診し、処方箋の投与から術後経過の観察までを連続的総合的にできる「地域生活のまち医者」を育てていくことが、地域社会を担う「ひとづくり」である。

これからも学生の感性と個性を発揮する場を「まち」につくり、知恵と技術を駆使して学生の熱い想いをカタチにできる地域教育を展開しながら、将来のまち医者像に近づけたいと考えている。「まちがひとを育て、ひとがまちを育てる」関係を築くことで、ひととまちの融合が生まれる。地域に誇りを持つことこそが、ひとづくりの精神である。

参考文献

- 1) 岐美 宗：会員紹介，（社）日本都市計画学会・中国四国支部ニュースレター，No.22，pp.14-15，2009などの著者関連報告および資料
- 2) 亀田和彦ら：PBLを用いた水産系リカレント教育の可能性，長崎大学水産学部，http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsfe/D.P/Vol3/No3_4.pdf
- 3) 岐美 宗：竹原市中心市街地活性化のための産学官連携モデル事業—たけはら一店一自慢おでかけまっぷ—，日本福祉のまちづくり学会全国大会概要集，Vol.11，CD-ROM，2008